

## 清末の北京における芝居改良運動

—— 『京話日報』を中心に

蔣 涛

はじめに

一九世紀末葉から二〇世紀初頭にかけて、日清戦争、戊戌政変、北清事変、科挙廃止などといった一連の劇変を経てきた中国では、現状に不満を抱いている有識の士が社会の各方面で様々な改良運動を試みた。一九〇四年から北京で起きた芝居改良運動は一連の改良運動の中の一つである。芝居改良運動の発端は当時北京で発行されていた一般庶民向けの新聞『京話日報』による呼びかけであった。

『京話日報』は彭翼仲を創始者にして、一九〇四年（光緒三〇）八月に北京で創刊された。編集者には彭氏以外に杭辛齋、吳梓箴、春治先等が加わる。官話（北京語）で記事を書くため『京話日報』と命名され、「文明を導入し、風俗を改良し、気風を切り開き、民知に益す」を趣旨に、演説・要緊新聞・本京新聞・各省新聞・宮門抄・上諭・告示・專電・小説・解字・講書などの欄を設けた。『京話日報』は創刊以来、一九〇六年九月から一九一三年七月五日まで、及び一九一三年七月二八日から同年一〇月三一日までの二回にわたって一時休刊に追い込まれていたのを除き、一九二三年四月五日に休刊するまで延べ四〇四三号を発行している。最多発行部数は一万部を超え、清末民初の北京における最も影響力を持つ新聞の一つであった。

本稿では、『京話日報』に掲載されている芝居改良運動に関する記事に基づき、芝居改良運動の全容を明らかにした上で、その運動が近代中国の戯劇史および都市文化史に占めた意義を論じたい。なお、紙幅の関係から、本稿は二回に分けて発表する予定である。

### 一、芝居改良運動の発端

『京話日報』は先ず創刊直後の第十号に「戯曲翻新」と題する記事を掲げ、上海の名優汪笑儂（一八五八—一九一八）の行動を実例に、伝統芝居の総本山である北京の梨園でも演劇改良を行うように呼び掛けている。

京城の芝居は最も著名である。しかし繰り返して演じられている演目はいつもの古臭いものばかりで、新鮮なものがない。芝居の良し悪しが社会に大きく関係することは言うまでもない。現今の東西各国にはいずれも王室主導の劇場があるがそれというのも、もっぱら古今の奇談を芝居に作り、音楽の抑揚にしてもみな趣向を凝らして最善を尽くし、すべては国民の品性を陶冶し、国民の意気を発奮させるためである。ゆえに国家の政治や風習を変えるためにまず芝居を改良しなければならぬ。今上海の梨園に汪笑儂という名優がおり、彼が『党人碑』という芝居を作り、北宋の故事を題材に、権力の座にある奸臣が忠臣を陥る事柄をそっくりそのまま描き出している。観客は卓を叩いて痛快だと叫んだり、齒軋りして悔しがったりする。本当に素晴らしい芝居だ。最近はまだ『瓜種蘭因』という芝居をも作ったが、ポーランドの故事を題材に亡国による悲しみと亡国の民が体験する凄惨さには涙を落とさずにはいられない。京城には有名な役者も多く通人才子もすくなくならず、もし何本かの新しい芝居を作ってくれば、必ずや社会の風習を広く切り開くこととなり、それはわが京話日報の力より十倍ほど大きいはずだ。

アヘン戦争以来、列強との争いに悉く敗れてきたことよって「天朝の威光」が地を払った中国では、いち早く翻然と目覚めて「師夷長技以制夷」を唱えたのは知識人であった。例えば洋務運動のように西洋諸国から近代工業を導入する動きのほか、思想の面においても国家意識を国民に教え込もうとする動きもしばしばみられるようになった。右の引

用文に名前が挙げられている汪笑儂は満州族出身で県知事まで務めていたが、官職を失った後に芝居役者に転身して上海で名を成した。彼は役者を務める傍ら自ら数多くの脚本を創作したため、「儒伶」と呼ばれていた。汪笑儂が作った新しい芝居には前掲の『党人碑』と『瓜種蘭因』のような内外の歴史物語を題材にしたものがほとんどだったが、それはいわゆる「借古諭今」（古代の事柄を借りて現実を諭す）という手法であり、封建専制時代において芝居を使って輿論を喚起するために許された唯一の方法であった。じつは『京話日報』の編集者は戊戌政変および義和団事件後の北京の現状を憂慮すると同時に、依然として沈滞しきっている梨園に対して強い不満を表し、上海の汪笑儂を見習って国民の志気を奮い立たせる新作劇を作るように北京の梨園と知識人に呼びかけたわけである。また右の引用文では芝居の役割が強調されていることも注目すべきところである。つまり芝居というものには娯楽の作用以外、国民の愛国心を啓発する作用も持っているということ。この見解は陳独秀が一九〇五年に発表した『論戯曲』の中で同様な論点を示すことより一年ほど早かったことになる。

上海の芝居は一八七〇年代に北京から南下した役者が上海に定住し始めたのを皮切りに、次第に同地の特色を帯びる演出手法を作り出し、「京派」で表現される北京の芝居に対し「海派」と呼ばれる派手な舞台を提供することになる。だが、皮黄劇を代表とした伝統芝居の本家を自負した北京の梨園からは、「海派」と軽蔑され、上海の芝居と役者が受け入れられることはなかった。こういった状況は中華人民共和国成立までも続くことになる。それゆえに北京では当時唯一の近代的宣伝媒体である新聞で上海の芝居事情を紹介し、さらに北京の梨園に対して上海の役者を見習うよう呼びかけたことは極めて異例かつ大胆な行動であったといっても過言ではない。ということは、『京話日報』の編集者は梨園の事情に精通していながら梨園の伝統にとらわれず、あえて長年のタブーに挑んだというわけだ。いやむしろ従来北京の梨園に蔑視されつつあった上海の芝居事情を敢えて称えることによって、沈滞しきっている北京の梨園に刺激を与え、梨園内部による改良を促したとも言えるだろう。

右の記事が掲載されてから三ヶ月後、『京話日報』では二日に分けて「説戯本子急宜改良」という長篇論説が掲載され

ている。重要と思われる指摘が見られるのでやや長文だが敢えて引用しておく。

(前略) 世の中で最も易しく人を感動させるものと言えば、芝居より優れたものはない。故に各国においても芝居が大変重要なことと看做されている。作られた台本は全て文部大臣による検定を経てから始めて舞台稽古が許される。それは無数の個々の人民に直接指導することは不可能であり、良い芝居があれば、教育を受けた人なら自然に深い感銘を受けるはずだからだ。たとえ如何に愚劣で救いようがない者であっても、ただ目で見て耳で聴きさえすれば舞台上の一挙手一投足が真髓を伝えるにしたがつて次第に感動を覚えるようにならずにはいられない。もし人の意思に従って勝手に戯曲を作れば、良風美俗を破壊するものを作り出すに違いない。一時の快樂のために永遠に憂患を残してしまう。中国の芝居は当初かなりまともなものであったが、月日の経つうちにただ暇つぶしや退屈しのぎのためのものとなり、とどのつまりは種々の荒唐無稽な妖怪変化や淫詞蕩曲が作り出されてしまった。幕が開くと、芝居の良し悪しを問わず、とにかく名優でさえあれば如何なる不条理な芝居であっても鳴りも止まぬ喝采を浴びる。この喝采が実に心の奥底から出た声である。さらに様々な奸盗邪淫の類の芝居を打てば、観客はまさに有頂天になり我を忘れてしまう。読者諸君、熟考したまえ。これはいったいどういうわけだ。歌舞音曲は最も早く人を感動させるもの。いわんや舞台に立ち芝居を打つにおいてをや、である。観客が思わず知らず偽りを真と取り違える。それがゆえに悪い芝居は良い芝居よりもっと容易く客受けされてしまう。現下の有名な劇団には優れた花旦がいなければ一座の運勢は隆盛におもむく見込みがない。(中略)

北京の劇場に婦女を入場させないのは観客に騒がれるのを恐れるほか、芝居の内容も良くないからである。大衆が集まる公の場所では実に恥ずかしいことだ。もし本当に芝居の内容が良くなり、教化を経て大衆にも礼儀をよく弁えてもらえれば、婦女が観劇しても構わないだろう。中国は現在、上等と中等の人においては、たとえ自分が物分かりがよくななくても、周りの親戚や友人たちの中にも物分かりの良い人がいるはずだ。他人の良い意見を受け入れても良ければ他人の良い行いを見習ってもよい。ただ多数を占める下等の人だけが、小さい時から読み書きを覚

えておらず、殆ど目に一丁字もない。これらの人々を教化しようとしても、たとえ新聞社を創業し新しい本を印刷しても、まったく彼らの目に入らないのである。彼らに古今の大事を知り、善悪を分からせるためには、芝居以外の妙薬があるとでもいうか。別に高雅なものを求めるわけでもない。ただ二黄と椰子腔さえあれば俗人の耳目を楽しませることができる。これこそ効き目のある良法だ。

現下上海には汪笑儂という名優がおり、彼が数多くの新しい芝居を作り、様々に工夫を凝らしたが、意図があまりに深すぎるため、下等の人はこの種の芝居を見るのに適していない。加えて汪氏の作った新しい芝居は時に悖る傾向があるため、租界の外では上演不可能であり、広く押し広めることは容易ではないだろう。我々の浅見を申せば、先ず妖魔変化の芝居を悉く禁止すべきだ。洪君老祖や齊天大聖<sup>②</sup>などの物語も真つ平御免だ。義和団の行為が芝居を真似ればこそそのことだ。この種の芝居を禁止すれば、愚民の心の中にたくさん妖魔変化がなくなるにつれて彼らに道理を説きやすくなるはずだ。さらに奸盜邪淫の芝居も何とかして改めなければならぬ。しかし舞台上に正生と老旦ばかりが出ていても時折つまらなくなってくる。そこで奸淫の芝居を結果まで丸ごと演じたほうが良い。中途半端ではだめだ。その芝居を丸ごと観終えれば、人々は必ず心が動いてしまう。そのうえ、悪人が足を洗って真人間になるとか奮発自強とかの芝居を作り、併せて至るところに合群愛衆（皆の力を合わせて、互いに助け合い、互いに愛し合う。国同士は傷害し合うべからず）という公德心を表明すればよい。ここから手をつければ、学校や新聞社よりきつと効果が大きい<sup>③</sup>。

つまり『京話日報』は三ヶ月前に掲載した「戯曲翻新」に続き、芝居の役割と芝居改良の重要性を改めて力説したのである。中国では、芝居が単なる娯楽の道具ばかりでなく、無学の民衆にとっては人生の教師ともいえるわけである。二〇世紀初頭の中国において、汪笑儂のような既に庶民における芝居の役割を意識し始めた人物が現われたが、専制政体のもとで芝居を民衆を啓蒙する道具として用いることは決して容易ではなかった。汪氏による芝居改良の成功は、あくまでも封建統治の中心たる北京から遠く離れている上海、しかも租界という特殊な地域に限られているからこそ達成

されたといえるだろう。そこで、北京における芝居改良の具体策として、『京話日報』の編集者は無難な主張を掲げ、先ず神仙妖怪劇から手をつけるべきだと述べたのである。こう主張した理由として一九〇〇年（光緒二六）に起きた義和団の乱が挙げられている。義和団とは、一九世紀末に山東と河南の農民による義和拳と呼ばれる拳法を習う人々の秘密結社であったが、当局の黙許を得て一八九九年に直隸と東北まで勢力を拡大していた。翌年に西太后の支持を後ろ楯にした義和団は、「扶清滅洋」（清を助け列強を滅ぼす）というスローガンを掲げて北京の外国公館と教会を包囲し、攻撃を加えた。しかしこの行動は結局日独米英などの八カ国連合軍による北京攻略を引き起こしてしまったのである。事後、列強に講和を申し出た清朝政府は一変して、義和団を匪徒と罵り、対外関係失敗の責任をすべて義和団に転嫁した。それゆえに『京話日報』の編集者は義和団を反面教師として例に挙げることで芝居改良の必要性を強調したのである。当時、西太后をはじめとした保守派が依然として実権を握っている状況においては、このように義和団を否定することによって芝居の改良という敏感な話題を和らげようとしたのであろう。右の引用文から判断できることは、二〇世紀に入つたものの、封建統治の中心たる北京では芝居という限られた領域であれ、古いものを改良することが容易ではなかったということだろう。

前掲の論説が掲載されたほぼ百日後の第二〇四号の【演説】欄に「又有一位満洲人説話」と題する短文が掲載されている。

（前略）汪大頭と叫天を軽視すべからず。新聞人は特に彼らを敬服している。彼らは無数の俗人をよく揺り動かせ、その影響力は政府より大きい。惜しむらくは彼らに注意を与える人がいないこと。彼らも良い人に出会わなかった。もし彼らが少しでも力を出し、よりよく新しい芝居作りを進め、民知を開くためによく考えてくれれば、我々の新聞社の力より万々万々万倍ほど大きいのだ。惜しむらくは彼らに注意を与える人がいないこと。彼らは良い人に恵まれなかった。汪大頭の行為は一風変わっているが、この人はなかなか思慮深い人であり、少し注意を与えられとすぐ悟るはずだ。これらの人たちが大いにわが中国を救ってくれるに違いない。惜しむらくは彼らに注意を与

える人がいないこと。彼らは良い人に出会わなかった。上海の汪笑儂は本当に神様のようだ。<sup>④</sup>

汪大頭は汪桂芬（一八六〇—一九〇六）の綽名、叫天は譚鑫培（一八四七—一九一七）の芸名である。二人とも当時の人気役者として一般庶民に対して絶大な影響力を持つ人物である。

右の短文はある満洲人の口による意見とはいえ、第十号に掲載された「戯曲翻新」における主張とはほぼ一致している。アヘン戦争以来、清王朝の国勢が日増しに衰微すると共に支配階級内部においても、満洲貴族を代表する保守派と漢人官僚を代表する維新派との矛盾が激しくなってきた。戊戌変法の失敗をもって維新派が支配階層での権力闘争から大いに後退しながらも、新聞などを媒介に庶民を啓蒙することに重点を置き始めた。しかし、読み書きさえできない「愚民」の前で新聞の限界を感じた維新派は、芝居を通して改良の思想を庶民に浸透させようとしていた。それに賛同したのが漢人知識層に加え、見識のある満洲人だった。右の引用文は『京話日報』の編集者が満洲族の身分と彼らの梨園における影響力を利用して、梨園に行動を起こすように呼びかけたものと見做すことができるだろう。

芝居改良を達成するためには、何よりもまず梨園の実力者からの理解が欠くべからざるものである。そこで『京話日報』の編集者が当時北京梨園の大御所であった汪桂芬と譚鑫培に上海の汪笑儂を見習うように呼びかけたのは、名優の声望を借りてあらゆる階層からの支持を集めようとしていたということだ。はたして汪譚両氏がこの呼びかけに応じていたのか。

前掲の短文が掲載された半月後、第二二四号の【演説】欄に茗秀という作者による「唱戲的也敢説話了」と題する寄稿が掲載されている。

（前略）先頃、貴紙に芝居改良の一節があり、汪譚両氏を注意するところもあった。將に彼らの名望を借りて世の耳目を一新しようとしている。拙者が拝読して心から感服したが、奈何せん志が大きいわりに才能が伴わないため、たとえ無理矢理に芝居を作っても、つまらなくて人にも好まれない。やはり貴紙にお願いしたい。まず当該官庁の当局要路に献言してほしい。適切に白話で布告を出し、良風美俗を破壊するような淫らな芝居を禁止すべきである

と。また詩作にふける才子にもお願いしたい。必ずしも風月ばかり云々するのではなく、古今中外の愛国愛民の事柄を種本に新しい芝居に作り、さらに各劇団の名優たちとその芝居を演じてほしいと。そうなれば世道人心を益するのみならず、また世の耳目を一新することができる。それに必ず儲かるに違いない。どうして喜んでしないことがあるのか。こうした勸善によって人々の良心が目覚めれば、我々が生業をしているこの賤業は人に見下げられるまでには至らなからう<sup>⑤</sup>。

右の引用文は、内容から見れば、『京話日報』の呼びかけに対して梨園の一般的な者の立場からの返答であったと考えられる。「国家の興亡、匹夫に責有り」という言葉の如き、前文の作者が『京話日報』の呼びかけに賛同の意を表明したものの、自分たちの無力さを正直に認めた。そのうえで逆に、普段は国事を己の務めと自負している知識人たちに呼びかけ返した。つまり、もし風月を吟詠することが太平の世に処する文人墨客（知識人）の役目だとすれば、まさに国家が存亡の危機に面している今こそ、知識人が自分の持つ才能をもっと発揮すべきではなからうか、というわけである。

右の引用文にはもう一つ注目すべき点がある。すなわち文中に初めて「愛国愛民」という言葉が用いられているところである。この表現は前掲の第百六、百七号に現れていた「合群愛衆」という言葉より一歩前進したと見ていいだろう。というのも、そもそも愛国という概念は近代以降初めて普遍的に使われるようになったからである。従来中国では頻繁に起こされた易姓革命によって、王朝の交代が絶えず行われていた。それに従って、国号も様々に変わってきたが、唯一不変なのは歴代の君主つまり皇帝への忠誠心そのものであった。それゆえ、中国史上の愛国という理念は忠君という行動にしか体现されていなかったのだ。では、なぜ右の引用文では忠君ではなく、あえて愛国という言葉を用いていたのか。前述のとおり、清末の中国におけるもっとも深刻な問題はほかではなく、帝国主義列強の圧迫から国を守るということであった。愛国という言葉が新聞に登場したことは、まさに国家存亡の瀬戸際に置かれていた当時の中国社会に変化が起こり始めたことを反映していると考えられるのである。



## 二、梨園による芝居改良運動への参加

芝居改良を呼びかける文章が『京話日報』に初めて掲載されてから半年以上経っているにもかかわらず、梨園とりわけ名優からの反応は殆ど見られなかった。とはいえ、梨園には頑迷なものばかりいるわけでもない。右の寄稿が掲載されたおよそ二ヶ月後、第二八一号の【本京新聞】欄に「梨園中出了明白人」と題する記事が掲載されている。

福寿班の主人余（玉琴）が弊社を訪問する。彼は愚民を開化させる方法としては芝居の変革しかないから、少年を募集し新しい芝居を作って演じると考えているようだ。弊社と相談して、見識のある旦那たちに頼み込み、ちゃんとした芝居を作ってもらおうという。その意図は我々の考えとぴったり合致している。そこで、意思を固めて苦心を重ねてこそはじめて成功を収めることができる、彼を励ましておいた。しかし台本を書くことは容易というものの、その経費はかなりかかりそうだ。資金の有無を問うと、彼は困惑気味であった。そういう考えさえ持つていれば、きっと事理に通じている人のはずだが、この種の物分かりの良い人は例外なく手元が不如意だ。とにかくこの一件を新聞に載せておく。今度我々に暇があればまた金持ちを説得するつもりだ。これは決して劇団を鼻直しで楽しむというわけではなく、風習を改めるためには芝居の速効性が第一だから。弊紙では汪譚両大名優に勧めていたが、志を持っている人は意外にもあの二人ではないようだ<sup>⑥</sup>。

梨園関係者が『京話日報』の呼びかけに躊躇していた理由はこれで判明したようだ。まず、日常の公演を妨げない形で、それとは別に新弟子を募集して新しい芝居を習得させなければならぬ。これは劇団にとって余計な負担となる。さらに文士に台本を書いてもらうためにもかなり資金が必要となる。また、北京の観客は芝居を見る目が厳しいことで世に知られているため、はたして新しい芝居が観客に受け入れられるかどうかは誰にも予測できない。要するに、芝居改良を成し遂げるためには単に梨園関係者の力だけでは無理である。芝居というものはすべての人に多かれ少なかれ影響を及ぼすことができる以上、芝居改良にも社会のあらゆる階層からの支持がなくてはならないということだ。

右の引用文が掲載された十日後、第二九一号の【演説】欄に嵇廡による「改戲」と題する論説が掲載されている。

(前略) 弊紙では役者に呼びかけたことがある。本来は汪譚の名望を仰いで、彼らに先頭に立つてもらおうというつもりだったが、その後の両氏を見ると、一人はまるで隠遁者の如く、もう一人は交際に熱中しているため、我々の呼びかけに見向きもしなかった。ところが志をもって現れた人は意外にも且を務める役者だった。氏の姓は余、名は玉琴、人は余荘と称す。この余荘君は、年が若いのに経歴がなかなか深く、精忠廟の廟首を長く務めていた。彼は武旦を好んで務めているため、自然と俠氣に富んでいるのだ。彼が弊紙掲載の忠言を信じて芝居変改につき相談に来たわけである。我々が全くの素人で、如何に変えるかは、やはり他の有能の人に依頼しなければならない。我々には全くわからないのだ。彼はなかなかの熱血漢で、自ら進んでこの責任を引き受けようとしている。本当に有難いことだ。ただ困ったことが二つある。一つは梨園の同業者がおそらく納得できない。古い芝居に新しい台詞を添えることは誰しもその通りにやると承知しない。もう一つは、経費が足りないことだ。金持ちには芝居を変える意味が分からず、誰しも助けようとしめない。台本作りに至ってはわりあい容易くできることだ。考えれば考えるほど、この意図が素晴らしいといえども、結局成功するか否かはまだ全然手がかりがない。ところが色々考えているうちに突然天外より朗報が飛んできた。諸君当ててみよう。如何な朗報だろうか。

近年、京城には票友が流行っていた。一般の票友の中に人材がないわけではないが、惜しむらくは良い時世に恵まれていないため、大いに不平を持っているにもかかわらず捌け口がなかった。やむを得ず、素人芝居に金を投じて甘んじていいカモになる。ところが弊紙では汪譚に勧め、また余荘を褒めると、票友たちは熱い心が刺激され、大いに有益なことをしようとしており、それによって自分の過去の過ちを贖う。このことについてはさらに一篇の演説文を作り、暇があれば掲載する予定だ。彼らの意図は余荘より一層優れている。損を承知でやるべきだと腹を据えてこそ、彼らは公益に熱心で義侠心に富んだ人だと言える。余荘師匠に真に愛国心があれば、票友諸君を一時の知己と称するべきだ。みんなが心を合わせて協力することによって、下等の人々が開明するなら、数十年後に北京の開化を振り返った時、必ずやその原因を探求していくだろう。その際、必ず中国が弱から転じて強となったの

は民知を開いたことにあり、民知を開く方法は北京の票友により、票友の熱心は実に余師匠の激励によるものだと  
いうことが明らかになるはずだ。諸君、芝居というものは大切なものではなからうか<sup>⑦</sup>。

ここで言う精忠廟とは清代の北京梨園同業組合である。その場所は前門大街以東の精忠廟（宋代の名将岳飛を祭る廟）  
の中にあるため、一般には精忠廟と呼んだ。組合の責任者は内務府に任命され、通称会首あるいは廟首という。

『京話日報』が梨園を対象として芝居改良を再三呼びかけていたが、種々の原因から梨園からの反応は予想通りではな  
かった。だが意外にも、普段から梨園に軽視されている票友がこの呼びかけに積極的な姿勢を見せてくれた。票友は清  
初には八旗の子弟が朝廷から与えられた「龍票」を持って各地へ赴き子弟書を歌い回り、朝廷のために宣伝していたこ  
とに由来する。後に素人芝居に従事する（玩票という）八旗出身の道楽者を票友と称するようになった。票友は皇族か  
ら官僚、武人、一般市民に至る社会の各階層まで及んでいた。清末から民国初期にかけて没落した八旗の子弟が梨園に  
身を投じ、素人から玄人に転身した例は枚挙にいとまがない。素人でありながら技芸では玄人の俳優と肩を並べる票友  
は少なくなかった。前出した汪笑儂は票友出身の名優として知られている。当初は一向に渉らなかつた芝居改良運動も  
票友の参与によって大きな転機がもたらされることになる。

そこで第二九七号の春治先による「票友熱心」と題する短文を見ておく。

嵒齋君は民知を開くために新聞を見るより芝居を変えるほうが良いとおっしゃった。確かにその通りだ。しかし  
劇団が新しい芝居を作るとは実に容易ではない。そこで、やはり票友諸君に登場を願うしかない。本当に熱心に  
提唱するならば、票友の精神は当然劇団と違う。ある人が台本を作ろうとしていると聞いたが、出来ているかどう  
かは不明だ。この件がいち早く完成することを願っている<sup>⑧</sup>。

殆ど読み書きのできない役者たちと違い、票友の中には学識に富んだ人が少なくなかつた。汪笑儂のような劇作者と  
演出家を兼務するような役者は当時ごく稀といえたのだ。時間的かつ金銭的にも余裕を持つ票友が自ら芝居を作り、さ  
らにそれを上演することになれば、思う存分に芝居改良ができるはずである。そこで票友の行動に刺激されたかのよう

に、梨園の大御所がつい動くこととなる。やがて第四一〇号の【本京新聞】欄に「唱戲的有了出頭之日」と題する記事が掲載されたのだ。

玉成班の座頭は各廟首を招き集め、正楽学堂を設立すべしと伝えた。その経費は当然少くない。ある人は募金を、ある人は株の募集を提案したが、何れも確証がないようである。現在皆で相談し、先ず一軒の義務茶園を建設し、京城の全ての劇団が連合して順番に義務茶園に出演することを決めた。公演収入は慣例によって貧困な同業者に報酬として支給する以外、役者と言える者には一切足代を支給しない。その金を少しずつ蓄えていけば正楽学堂の経費は予定が立つだろう。義務を尽くしていた役者が、病で舞台に立てなくなったり、あるいは老衰で暮し向きが貧しくなったりすれば、やはりその金で彼らを養う。ただ像姑下処を経営している者はこの例に該当しない。このような風俗は地球上どこにもない。もし像姑を免ずることができれば、これもまた文明というものである<sup>⑥</sup>。

玉成班の座頭とは名優田際雲（一八六四—一九二五）で、彼は清末民初の北京梨園を牛耳った人物として知られている。では、なぜ田際雲がこの時期に正楽学堂を設立しようとしていたのか。じつは一九〇五年（光緒三十一年）九月二日（旧暦八月初四日）に直隸総督袁世凱と湖広総督張之洞が朝廷に科挙を直に廃止し、その代りに学堂を普及させるよう上奏している。やがて朝廷はこの上奏を批准し、明年以降は各省においてすべての科挙試験を廃止すると同時に学堂を設けるよう命令を下した。これまでの科挙試験を受験するために専ら八股文を教える私塾と違い、近代的知識を伝授する施設として、学堂は一時社会からの注目を集めていた。

像姑下処すなわち司坊（私坊）の経営とは、主に女形を務める名優が自宅で弟子たちに客と陪食させるなどの接客業を営むとのことである。清代の法律によって官員が芸者を揚げることは厳禁されているため、像姑下処は官員および科挙試験を受験するために来京した文人たちの遊ぶどころとなったわけである。像姑下処の存在は梨園の全体像を汚しているため、梨園内部のみならず社会の有識者から非難されていた。

田際雲は学堂という新しいシステムを梨園に導入することによって、梨園における長年の積弊を払拭しようとしてい

たのだ。この行動は前年から一貫して芝居改良を唱えてきた『京話日報』にとって当然に歓迎すべきことだ。そこで『京話日報』は直ちに、梨園内部からの自浄行動に対する支持を表明した。それが、第四二二号の【演説】欄に見られる「正樂学堂的宗旨」と題する論説である。

先日弊紙は、梨園に正樂学堂設立の動きが見られるが、ただ司坊下処を開いている者の入学は許されないと報じていた。その意図による功績は実に大きいものだ。とはいえ、司坊を見下げるといふわけではなく、こういう風俗を改めようとしているのだ。次第に下処を開く人がいなくなると、京師は良俗の地として本来に文明の様相を呈するようになる。地球上においてもただ中国のみがこういった遊びを持ち、その中国においてもただ北京だけがこういう風俗が最も盛んである。(中略)司坊が学堂に入ること認められないのは、司坊に足を洗って堅気になつてほしいからである。もし専ら歌唱を本業とするなら、優伶という二文字も甚だしき卑賤までには至らないであろう。(中略)精忠廟の廟首たちが揃つて相談して趣旨を定めた。今から司坊を廃止さえすれば、同業の子弟はみんな入学し得る。

先ず彼らに一般の知識を教え、さらに開化に熱心である文人に依頼して、適宜な教科書を選定してもらおう。ともかく本当に役立つ能力を身につければ、たとえ役者をやめてもまたほかの仕事ができるはずだ。おおよそ作文に通じて算術に熟練していれば、さらに音律を詳しく究め得る。芝居を作る際、有形無形に大局に関するものとして愚人を覚醒させるべきだ。こうしてこそはじめて世道人心を有益し得る。昔の芝居には人を感動させるものもかなりあるので、すべて削除するには及ばない。凡そ良風美俗を破壊する芝居は、ひとまず記しておき、新しい芝居が出来てからまた徐々に削除すればよい。こうしてみると、芝居を打つことは実に重要なことである。以上に納得するなら、直ちに対策を講じるべきだ。口先だけで改良を説いても所詮かなわない。ただいま上申書を起草してまず南府<sup>⑧</sup>に呈上する予定だ。朝廷に定められた学堂規則には音楽という分類があるため、理屈から言うともまた学務処にも上申すべきだ。(正樂学堂の)創立経費は義務茶園から出る。観客が金を払い、役者が出演料無しで芝居を打つ。弊

紙読者諸君、このことを軽視すべからず、である。こういう行動があればこそ北京の風習は改まるかも知らん<sup>⑧</sup>。俳優業が従来は賤業と看做された原因には前述の像姑下処が挙げられるほか、俳優の中に無学の人が多いことが主な原因だと考えられる。俳優は幼い時から科班に入り、習芸に精を出す。芝居の技芸はすべて師匠から口授されるため、弟子が読み書きに触れる機会さえ得られない。田際雲をはじめとした有識者は科擧の廃止および学堂が民間に普及するという好機に乘じ、梨園に学堂を導入すると同時に像姑下処という積弊を除くことができれば、まさに一石二鳥と考えたのであろう。要するに、芝居改良を成し遂げるためには芝居そのものだけを改めるなどの物的改良のみならず、俳優業の社会的地位の向上といった人的改良をも欠くべからざるものであったということ。しかし、物的改良より人的改良の実施は予想以上に難しいのである。

第四三〇号の【本京新聞】欄の「梨園的通融辦法」が、そのことを示す。

先日、梨園関係者は正楽学堂設立を思い立ち、上海の例に準じて台本を改良し、音楽を是正しようとした。その意図は大変素晴らしくて実に世道人心に有益だ。ただ北京の優伶の中に司坊出身者が多いため、おそらく昔気質の旦那たちが頑迷固陋で、万一抵抗力が生じたら、せつかくの好意を無にするのではなからうか。だから趣旨を定めて司坊下処に関係する全ての者を入学させない。というのは、彼らを促すことによつて梨園全体を向上させようとするからだ。その意図は決して間違っているわけではない。しかし、司坊という習俗は久しく踏襲されてきたもので、あたかも女学では纏足を禁止するのと同じようだ。これから纏足を止めさえすればこのままでも入学できるという。もし纏足しない足でなければだめだとすれば、わが漢人の女子は現在のところ果して何人が学堂に入れるだろうか<sup>⑨</sup>。司坊廃止の妨げとなる「昔気質の旦那」とは、司坊に通う官員や文人らのことである。

清代初期から中期にかけて、雍正帝以下の歴代の皇帝が官員の劇場入りを厳禁していた。しかし清末になると、封建統治のたがが緩むに従つて、劇場で観劇するどころか競つて司坊に通う官員も後を絶たなかつた。いま残されている清末の官僚や文人らの手によつて作られた少年役者を誉める詩句から、当時司坊の繁盛ぶりが窺える。一方、司坊を経営

する役者にとっては、官員や文人との付き合いを通して、自身の素養と知名度を高める機会を得たとも言える。それに、司坊による収入が役者の出演料よりはるかに多いのも司坊経営継続を意図する最大の理由でもあった。したがって田際雲などによる司坊廃止への努力が事実上失敗に終わったことは、一面では必然のことだったともいえそうだ。ちなみに、司坊の完全廃止は中華民国北京政府が成立した後の一九二二年四月に実現することになる。

### むすびにかえて

清末の北京における芝居改良運動の特徴を列記してみると、以下のようになるだろう。

一、芝居改良運動の発動者は清末当時においての新しい媒体であった新聞を巧みに利用して、世論を芝居改良に有利な方向へ導くことに成功した。

二、「愛国愛群、開啓民知」といった理念が打ち出されることによって、従来逸楽に耽る道具としか見なされていなかった芝居だが、娯楽作用の以外に持つ教化作用が改めて認識されることになった。

三、梨園内部による役者の社会的地位の向上への努力が世の中から共鳴を得た。

とはいうものの、『京話日報』の限られた読者数、情報媒体としての限界などが要因となり、新聞による芝居改良の試みが社会の各層の全面的な支持、共感を得たものではなかったことは、いうまでもなかった。だが『京話日報』が進めた芝居改良に向けた姿勢は、その後の中国共産党によって導かれる京劇改革に見られるように演劇改革の先駆として評価されてしかるべきであろう。

① 『京話日報』第十号（一九〇四年八月二十六日）【各省新聞】欄より。

② 洪君老祖は『封神演義』の登場人物、齊天大聖は『西遊記』の主人公孫悟空のこと。

③ 『京話日報』第一〇六、一〇七号（一九〇四年一月二九、三〇日）【演説】欄より。

④ 『京話日報』第二〇四号（一九〇五年三月一五日）【演説】欄より。

- ⑤ 『京話日報』 第二二四号 (一九〇五年四月四日) 【演説】欄より。  
⑥ 『京話日報』 第二八一号 (一九〇五年五月三十一日) 【本京新聞】欄より。  
⑦ 『京話日報』 第二九一号 (一九〇五年六月一日) 【演説】欄より。  
⑧ 『京話日報』 第二九七号 (一九〇五年六月一六日) 【演説】欄より。  
⑨ 『京話日報』 第四一〇号 (一九〇五年十月八日) 【本京新聞】欄より。  
⑩ 南府すなわち昇平署は清代における梨園を管理する機関で、内務府の管轄下にある。  
⑪ 『京話日報』 第四二二号 (一九〇五年十月一九日) 【演説】欄より。  
⑫ 『京話日報』 第四三〇号 (一九〇五年十月二八日) 【本京新聞】欄より。

参考文献

- 王利器編輯『元明清三代禁毀小説戏曲史料』上海古籍出版社一九八一年  
張次溪編纂『清代燕都梨園史料・上下』中国戲劇出版社一九八八年  
『中国戯曲志・北京卷』中国 ISBN 出版中心一九九九年  
梁漱溟『憶往談旧録』金城出版社二〇〇六年